



退魔師  
セツナ

脱獄編・前編





妖魔、人間の負の感情、欲望から生まれた存在。


それを祓うために遙か昔から退魔師は存在していた。双方が敵対し、殺し合いを繰り返す関係。

しかし、変異妖魔の出現により、その関係性は大きく変化した。

本来知性を持たない妖魔が知性を持ったことにより人間のような行動をとるようになったのだ。

力任せの攻撃だけではなく、罠を張り、人質をとるようになり、退魔師を捕らえることも覚えた。

妖魔の存在が危険になっていたことは理解していた。しかし…



それでも、アイツは強かった。

何度か逃げるチャンスを探ったけど

アイツがいる限り無理そうだし

仲間が助けに来てくれるにしても半端な強さの退魔師じゃ捕まるか殺されて終わり

あの妖魔に勝てる退魔師か…



いやいや！  
あいつに助けられる  
なんて、絶対いや！

ブン



ブン  
それに……

調教されてる時に  
助けにでも来られたら

「わあ」

恥ずかしくて死ぬ……

カア……

カア……



何、顔を  
赤くしてるの？

あら？

もしかして、自分が  
調教されてる妄想でもして  
興奮してたのかしら？


仕方ない女ね

妄想通り、たっぷりと  
調教してあげる




雑魚妖魔が…

調子に乗らないで、  
アイツがいなかったら  
あんたなんか



舐められたものね  
今のあなたに負ける私じゃないわ



それにご主人様なら  
今日はいないわよ？

いない？

ええ、大事なようが  
あるみたいでね

だ・か・ら♡

ニヤッ

今日は私のやりたいように  
やらせてもらおうわ

クイン

使ってみたい拘束台も  
プレイもあったしね





こっちにも  
塗らないとね

いい感じ♡



あつ、いや!  
これぬるぬるして、  
ダメっ!!

ぬちゅ♡

ぬちゅ♡

ぐりゅ

ぐりゅ

ぐりゅ

ぐりゅ



啜えなさい。  
セツナ

（はあ）

や、やめて  
近づけないで！

（はあ）

〜ん〜ん

〜ん〜ん

ん…

ん…

んんんん

んんんん







(はあ)

ぬちゅ

(はあ)

こんなにおまんこ締め付けて  
私の疑似ちんぽ  
離さないようにしてるんだから!!

あはは!  
セツナ気持ちいいでしょ?  
気持ちいいにきまつてるわねよ?

んんん

ぬちゅ

ぬちゅ

ぬちゅ

ぬちゅ

(はあ)



本当にあんたは淫乱な女よね!  
手足拘束されて、興奮して!

んんん

(はあ)

(はあ)

ぬちゅ

(はあ)

退魔師のくせに  
抵抗もしないで犯される!  
さすが雌豚ね!

そのいやらしい胸も  
しっかりといじめてあげる

はあ

はあ

んんん

アッ  
アッ

ほら、セツナ。  
ありがとう  
っしょいしますはっ？

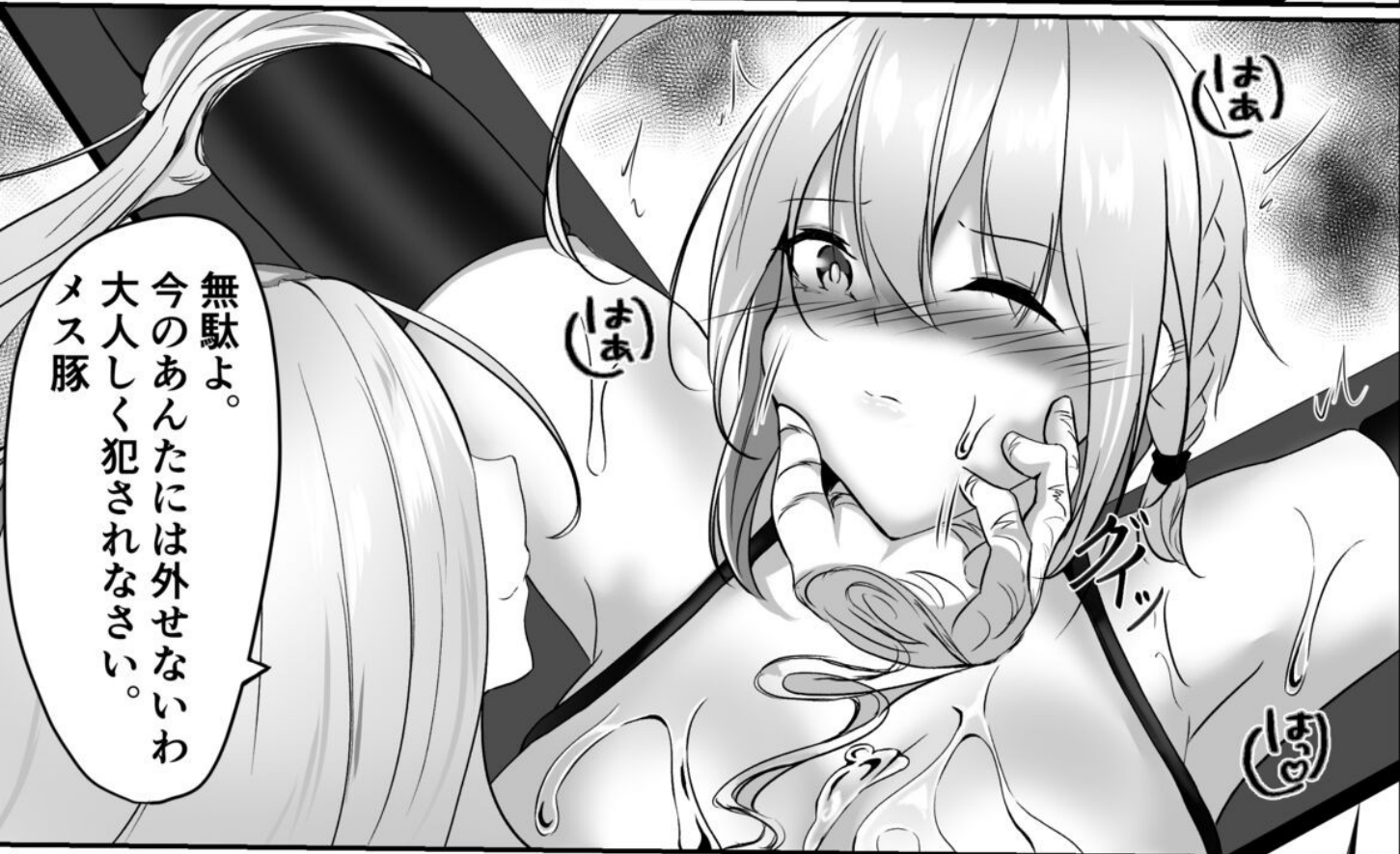
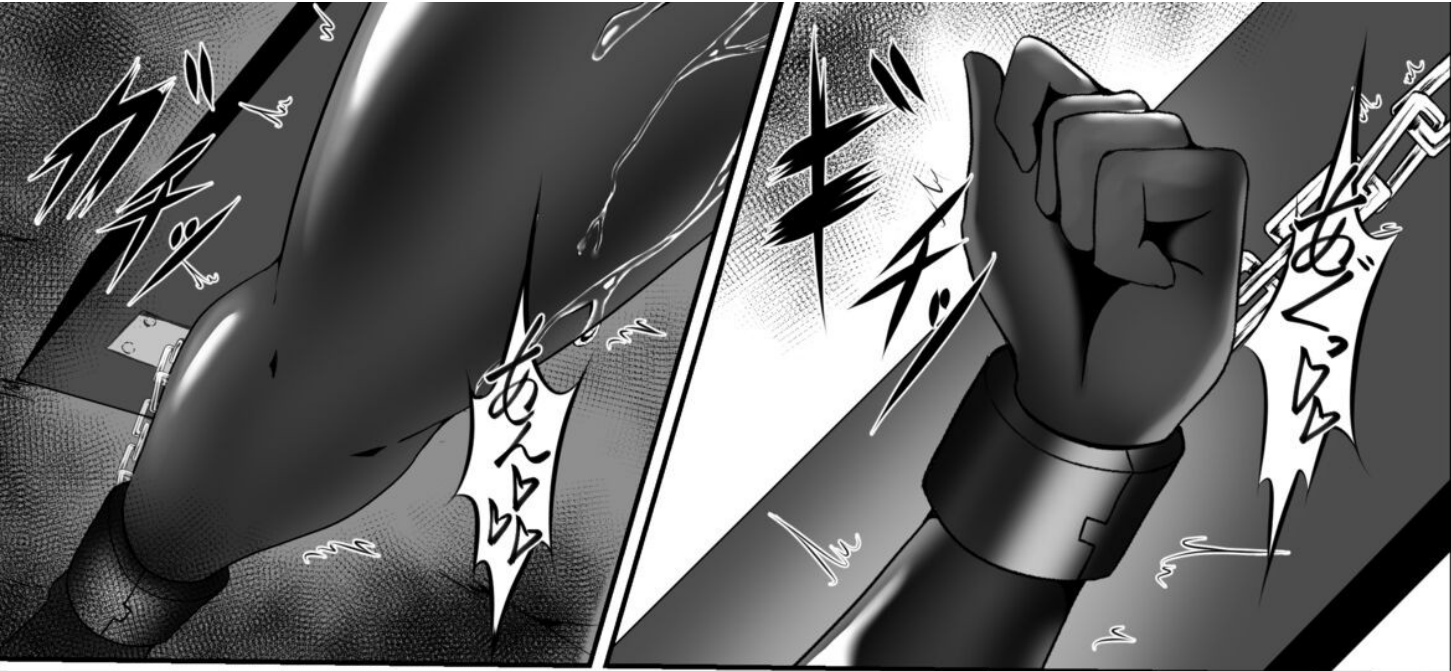
あ

あ

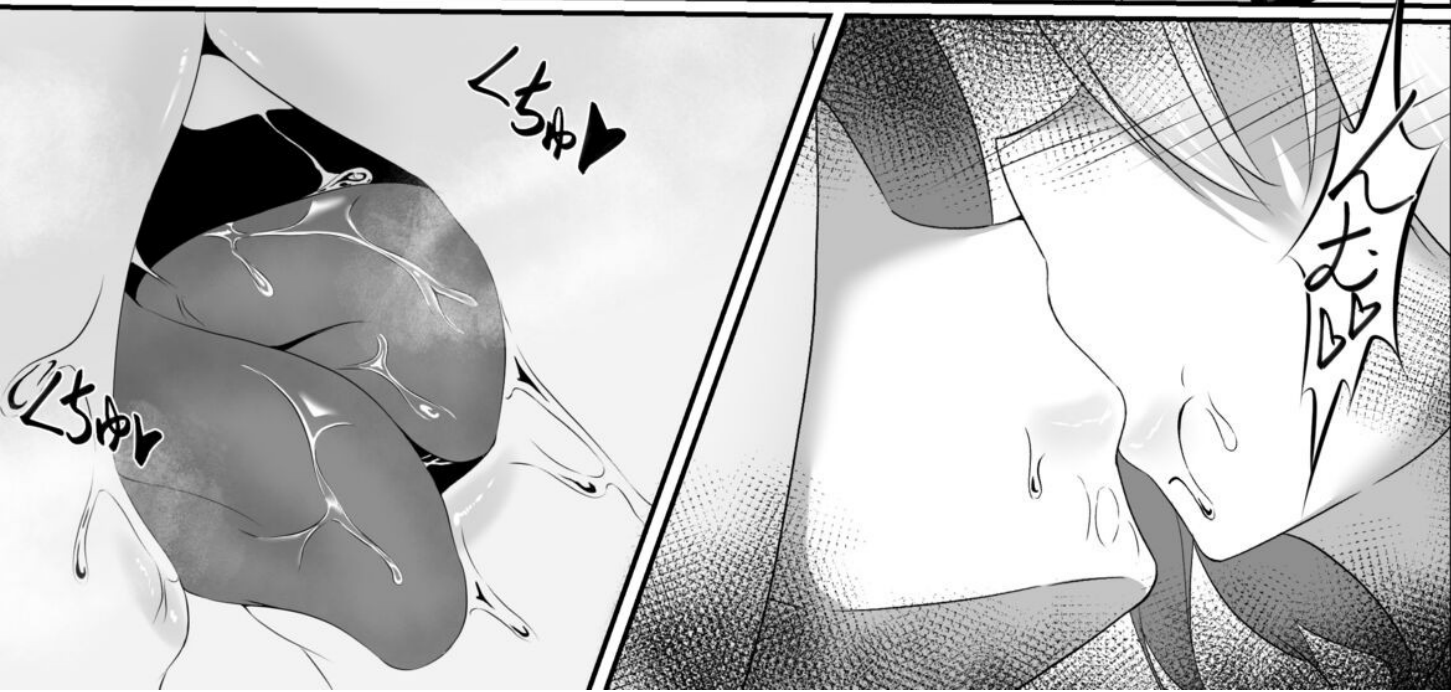
おっぱいとまんこ  
同時に犯してくれて  
ありがとうございますっ！

ぬちゅ

ぬちゅ



無駄よ。  
今のはあなたには外せないわ  
大人しく犯されなさい。  
メス豚





はあ

はあ

あはっ♡  
最高に気分が良いわ!

セツナの好きな  
鞭打ち?それとも...

さて、次は  
何しようかしら?

がしゃ!!

がしゃ!!



なっ、どうして？  
霊力はほとんど残ってない  
はずなのに

はあ

はあ

これでも一級退魔師なの  
あんたを被うくらいいの  
霊力を瞬間的に貯めるくらい  
できるのよ

はあ

私の身体に興奮して  
油断してくれて  
助かったわ

はあ

んぐっ…

はあ

退魔師専用  
（地下監禁室）

アキッ

アキッ

あん

アキッ

アキッ

アキッ

ほら、セツナちゃん

イク時はなんて  
言うんだっけ？

あん

アキッ

あん

アキッ

セツナは、ご主人様の……っ、  
おちんぽでっ……  
雌豚らし、らしく……

は、はいっ  
せっ、

あん

あん

アキッ

アキッ

あん

アキッ



それじゃ、  
さようなら

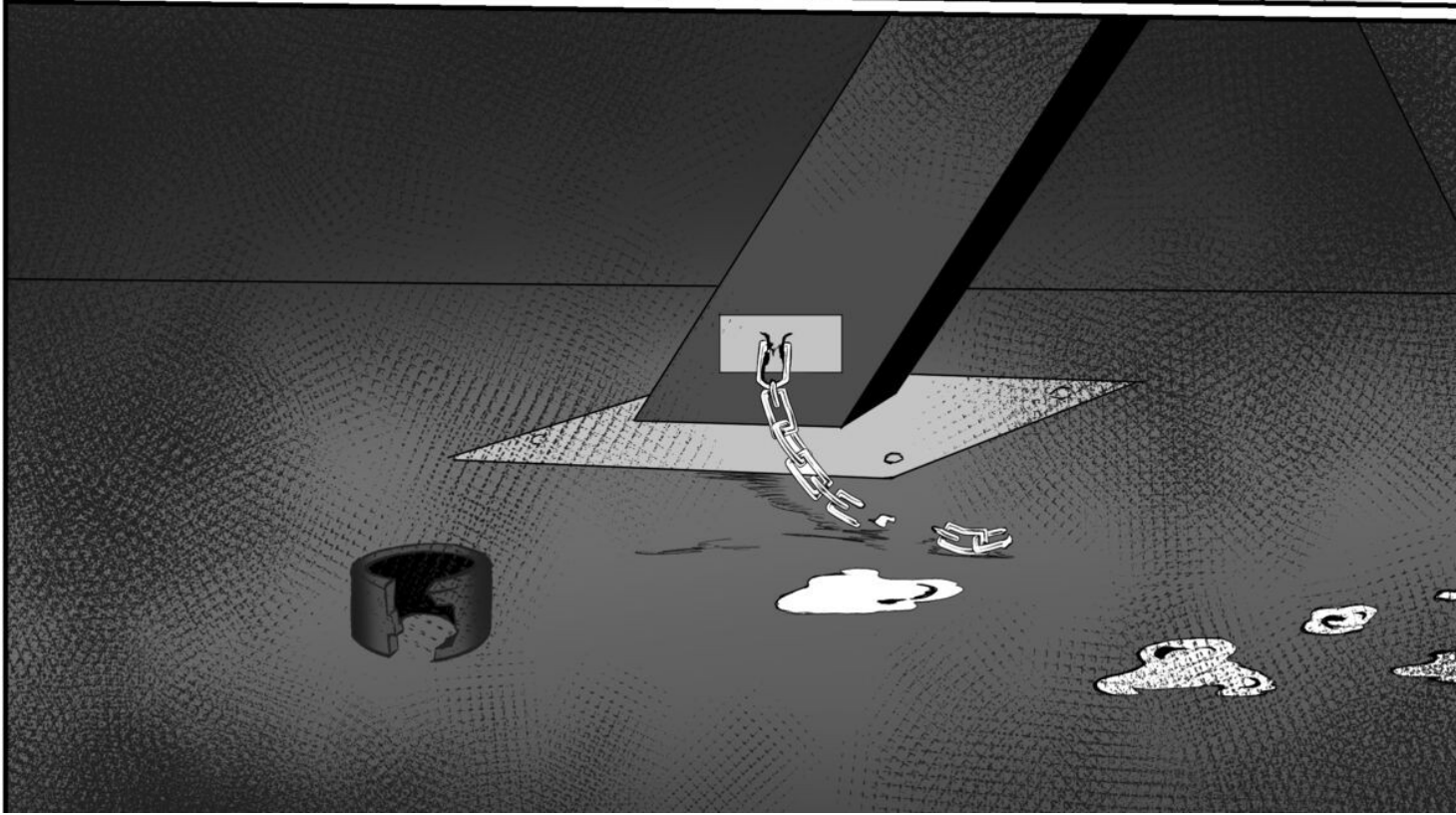
それじゃ、

まじりまじり



……っ

まじり……!



退魔師アイン番外編

〜エレム調教編〜

妖魔によって捕らえられたアイナは、妖魔の本部に連れて来られていた。蜘蛛型の中級妖魔。カルネに、いやらしい衣装を着せられ、拘束されたアイナは、チャンス伺っていた。妖魔達の中でアイナを欲しがる者は多かった。そのため、消される事はない。だからこそ、諦めなければ脱出の機会があると考えていた。



暗い怪しげな部屋にたどり着くと、  
そこには知っている顔があった。  
エレム。  
人の欲望から生まれた、サキユバスの  
姿をした上級妖魔だ。



「久しぶりね。アイナ」  
「エレム……。なんであんたがここに」  
「なんでって、あんたをここに連れてくるよう  
指示したのは私だからよ」  
「……」  
アイナは、これから自分がエレムに犯されるのだと  
さとり、無意味ながらも、彼女を睨みつけるのだった。

……

まぢっ



エレムのプライベートルームに連れて来られた、アイナは拘束具を外され、別の衣装を着替えるようにエレムに強要される。本来の力が出せるなら抵抗するアイナだったが、ここ数日妖魔に調教され、ほとんどの霊力を取られてしまった。そのせいで、アイナがエレムに逆らったところで、逆に振り返ちに合うのは、否定できない事実。アイナは恥ずかしがりながら、エレムの用意した衣装に着替えるのだった。

「ふふっ、やっとアンタの身体を楽しめるわ」

「んっ、くっ!!」

「あら、少し揉んだだけでそんなに感じちゃって、かなりエッチな身体に調教されたのね」

「感じてないわよ。アンタみたいな妖魔なんかには胸を揉まれたって…あっ!!」

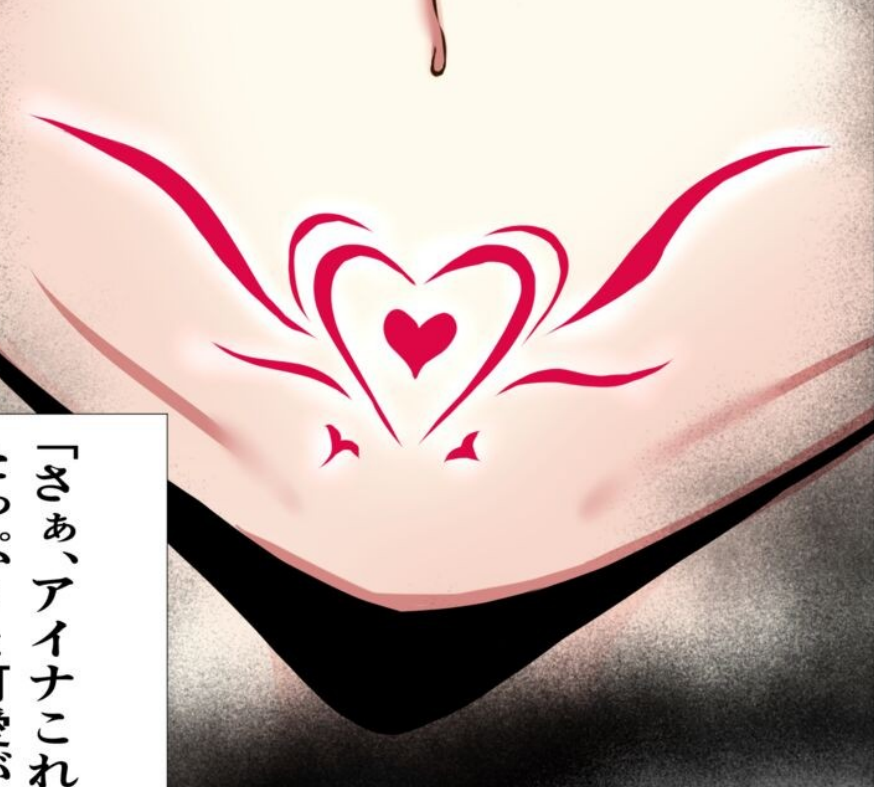
アイナの身体は既に胸だけでイカされてしまうほど敏感になってしまっていた。

「初めて会った時から、アンタは雌豚に向いてると思ってたけど、ここまで才能があるとわね♪」

言い返そうとするアイナだが、それすらできないほど、快楽が身体中を襲う。

「決めたわ。アンタは私の専属奴隷にしてあげる。しっかりと教育しなくちゃね」





ベットに拘束されたアイナは  
エラムによって淫紋を刻み込まれた。  
それは、身体の感度を上げる呪いであり、  
同時に刻み込んだ相手の命令に逆らう事が  
出来なくなるものでもあった。



「さあ、アイナこれでアンタは私の奴隷。  
たっぷり可愛がってあげる」

拘束を外し、エレムはアイナに自分の身体を舐めるよう指示を出す。甘い匂いを嗅ぎながら、アイナはエレムの首、胸、お腹、そして、女性器の順に舐めていく。舌がエレムに触れるたび、彼女自身も感じているのがわかった。ある程度時間が経つと、今度は逆にエレムがアイナの身体を舐め始める。エレムの唾液には媚薬効果があり、アイナの感度はさらに増していくのだった。



敏感になった身体を、イクかイカないかの  
ギリギリのところまで焦らし、エレムはアイナを  
再び拘束すると乳首とお尻を責め始める。  
「アイナ、イキたかったら、ちゃんとおねだりしなさい」  
目隠しをされ、お尻を鞭で軽く叩かれながら、アイナは  
歯を食いしばりながら耐えていた。  
例え、命令に逆らえない奴隷になったとしても、  
心だけは屈するわけにはいかなかったからだ。



どれだけの時間がたったのか。  
アイナの調教は休みなく続いていた。  
エレムが席を外してる間も、逃げられないよう  
拘束され、バイブのついた機械に座らされ、  
何度も絶頂を繰り返す。  
イカされる度に意識が飛びそうになるのを  
我慢しながら、エレムの帰りを待つのがあった。





「よく耐えられたわね…さすが元退魔師さん。  
さて、良い感じにほぐれたんじゃない？そろそろ  
私の愛をあなたの中に注いであげる。」  
不敵な笑みを見せるエレムを見て、アイナはただただ、  
耐えることしか出来なかった。

エレムが戻ってきたのは、  
放置されてから数時間後のことだった。  
機械によって、何度も絶頂を繰り返したものの  
意識をなんとか失わずに済んだ。  
エレムはそんなアイナを見て嬉しそうに声をかける。



エレムの尻尾が男性器のように形を変え、  
容赦なく、アイナを犯し始める。  
声を我慢することも出来ずアイナは喘ぐ。  
「あなたの負けよアイナ!!これから毎日  
犯して犯して、イカせてあげる。  
そして、アンタも私たち妖魔の仲間になるの!!」

高らかにエレムは笑い、何度も何度も挿入を  
繰り返す。  
子宮にエレムの精液を注がれ、  
アイナは簡単に絶頂する。  
そして、そのままアイナは意識を失うのだった。

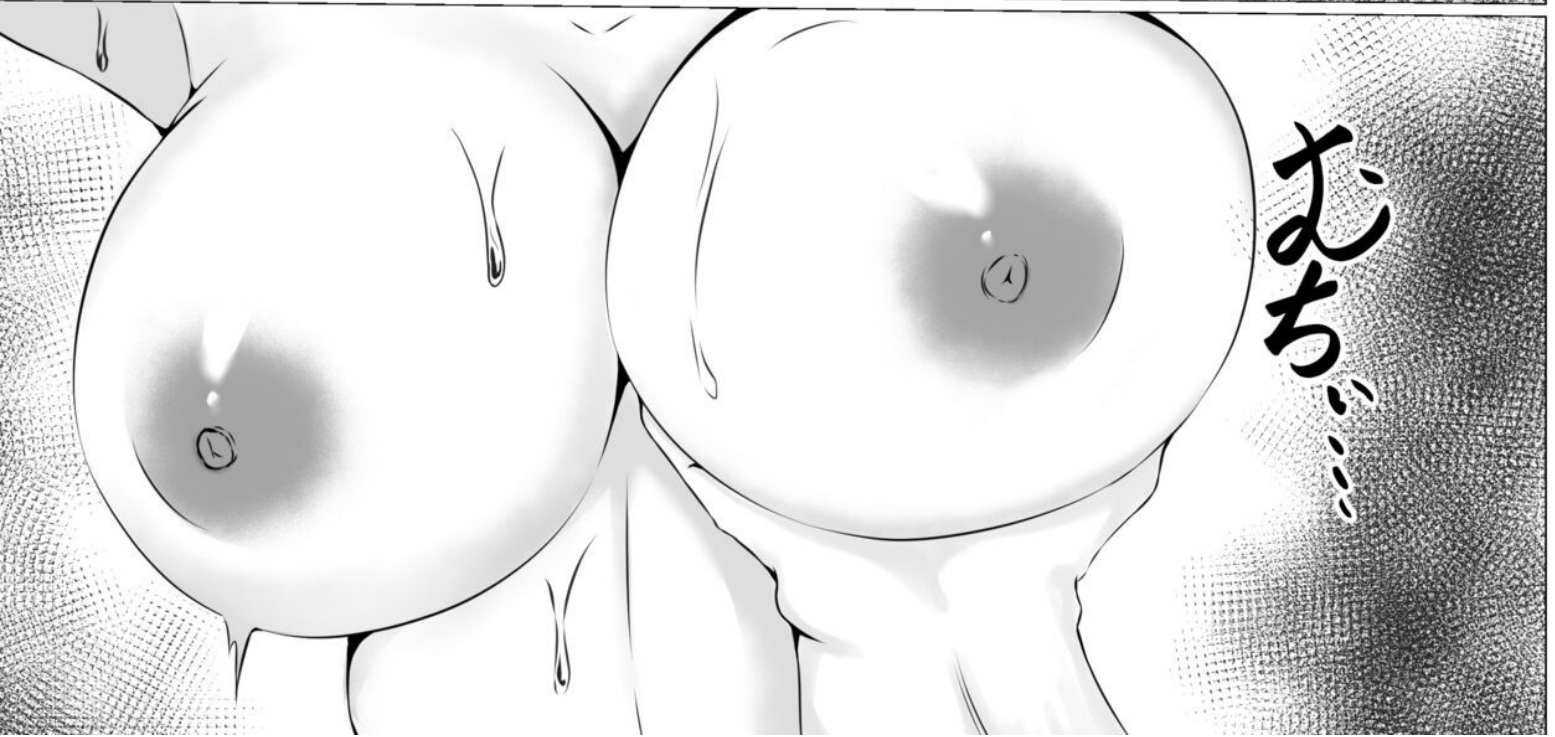
意識を取り戻した時、アイナは目隠しをされていた。  
手を頭の後ろに縛られ、股を広げさせられている。  
クスクスと笑い声が聞こえ、エレムの仲間の妖魔だとアイナは  
すぐに理解する。

妖魔に捕まり、犯され己の弱さを知る。  
それでもまだ負けてない。そう心に言い聞かせ、  
どこかわからない部屋で、アイナは再び妖魔に  
調教され始めるのだった。

to be continue...

to be continue...











グイッ

いや!  
まっ、待って!

グイッ



グイッ

グイッ



悔しい…  
こんな妖魔なんかの

